様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：１３６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０４６７９

研究課題名（和文）「美術を通した西洋理解」を推進する読解ベース型鑑賞指導メソッドの研究と題材構築

研究課題名（英文）A study on Instructional Method of Reading-Based Art Appreciation Which Improves an Idea, Western Understanding through Art

研究代表者
岡田　匡史（OKADA, Masashi）

信州大学・学術研究院教育学系・教授

研究者番号：３０１９４３６９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：平成20&29年版『中学校学習指導要領』第6節美術に記載の「美術を通した国際理解」に着目し，日本の中学生を主対象に西洋理解を学習目標に掲げる鑑賞指導法として「読解ベース型鑑賞指導メソッド」を主題化した。通算3期に亙り，その理論的検討と精緻化を図り，日本美術を使う東西比較も視野に入れ，本メソッドを適用した鑑賞題材の組織・構築を進めた。その結果，論文(3件)・口頭発表(5件)・研究報告(1件)を通じ，準備段階的内容も含め，本メソッドを使う計8種類の鑑賞題材を，各学習モデルも示す形で提起できた。鑑賞対象として厳選した西洋絵画を扱う題材内容を濃密化すべく，所蔵機関での現物観察・実地体験を原則実施した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の意義は，大量の情報が飛び交い，人的交流も盛んなグローバル化の中で現在求められる，読解力・言語活用能力・発想力・創造性・問題解決能力等を育む指導メソッドを鑑賞教育領域から提起することにある。と同時に，このグローバル化ゆえに文化の差異が強調される中，本研究では西洋を依然異質な文化圏と捉え，その西洋を理解するのに有効な媒体として絵を，即ち，暮らし振り，世界観，信仰姿勢，政治情勢，経済状態，文化的伝統等の情報が凝縮した対象として西洋絵画を選択した。その絵を読み解く読解ベース型鑑賞指導メソッドを，理論研究と題材開発とをリンクして示し，教育現場で活用可能な計8題材を示せた意義は大きいと自認する。

研究成果の概要（英文）：I focused on ‘international understanding through art’ described in Section 6 Art in “The Course of Study for Lower Secondary School” announced in 2008 and 2019. From this idea, I made ‘instructional method of reading-based art appreciation’ my subject and positioned junior high school students in Japan as primary objects to learn the West by this method. Including East-West comparison, in total three years, I considered this method theoretically and refined it. Additionally, I organized teaching materials by applying this method to them. I showed my research results by three papers, five oral presentations and one examination report and published eight teaching materials with learning models. To recognize Western paintings selected carefully as precisely as possible and to improve what to teach, I observed and studied real artworks at museums or churches in Europe and many relative exhibitions in Japan.

研究分野：鑑賞教育

キーワード：鑑賞教育　読解ベース型鑑賞指導メソッド　読解的鑑賞　美術を通した国際理解　西洋絵画鑑賞　西洋理解　東西比較　鑑賞題材

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

研究始動時の鑑賞指導メソッドの主要潮流を成していたのは，日本では対話型鑑賞，アメリカではVTS(ヴィジュアル・シンキング・ストラテジー)であり，知識偏重型・注入型の作品優位の鑑賞指導から，対話・コミュニケーションを土台に諸能力を育む人間形成型の鑑賞指導へのシフトチェンジは現在も進んでいる。そうした中で，鑑賞学習を改めて知の側面から再構築し，絵を見ることから読むこと，視覚的享受から読解の面白さに重心を移す「読解ベース型鑑賞指導メソッド」の探求を目標とした。

上記メソッドを使う鑑賞指導における対象作品は複数選択肢が想定できたが，グローバル化を背景とした異文化理解的関心から，改訂準備段階に差し掛かっていた平成 20 年版『中学校学習指導要領』の第 6 節美術〔第 2 学年及び第 3 学年〕B 鑑賞(1)ウに指導事項として記された，「美術を通した国際理解」に着目し，そこを踏まえ，西洋を表面的にでなく深部まで知り，本質的な西洋理解を獲得するのに有効な学習材・教育媒体として西洋絵画を選ぶ発想を固めた。

西洋絵画は西洋文化圏に住む人達には無論自明性が高く，特に名画の場合は，日本人にとっても多くが種々印刷媒体(含教科書)・TV 番組・インターネット等を通じ身近さが増す訳だが，改めて日本の学習者が文化的には異質さを満載する西洋絵画を学ぶ手立てを，読むことを柱に多角的に考えてみようとした。

２．研究の目的

一口で言うなら，読解ベース型鑑賞指導メソッドの考察と鑑賞学習モデルの構築が，本研究を行う目的となる。本研究では，1.に既述した平成 20 年版『中学校学習指導要領』第 6 節美術〔第 2 学年及び第 3 学年〕B 鑑賞(1)ウ記載の「美術を通した国際理解」を咀嚼する中で，近そうで遠く，知悉しているようで実は余り知らない西洋を学習対象に据えることとした。そして，彼の地で長い年月を掛け育まれてきた絵(視覚的文化財)を観ること，つまりは西洋絵画鑑賞を通じ，日本の学習者の西洋理解が着実に実質的に増し得るような指導方法の考案・提起を主要目的とした。その 1 つとして研究対象に掲げたのが，読解ベース型鑑賞指導メソッドである。ただし，理論研究に潜り込まず，理論・実践間の創造的往還に注意を払い，たとえ考察途次ではあっても，読解ベース型鑑賞指導メソッドを適用した読解的鑑賞題材案を種々構築し示そうと意図した。

３．研究の方法

絵の読み解き方については，「自由解釈，図像学的読解，テキスト準拠型鑑賞」の計 3 種メソッドを本研究の前段階に探求・提起済であり，一定の成果を示し得たとの認識を持つ。本研究では，或意味でオーソドックスなこれら 3 種メソッドを基盤に，「見る+読む」の基本形を，感受・想像・思考や情報探査・知識獲得をも媒介によりワイドな活動範囲で柔軟に捉え続ける中で，摑み得た読解的鑑賞のアイデアを練り，そこで得られる様々な読解方法を 1 つに束ねたり組織したりする形で読解ベース型鑑賞指導メソッドを一層豊かに構想すべく努め，その理論的検討に則る各種鑑賞題材を構想・提案する形で研究を進めようとした。

以上は概括的説明だが，研究方法に関する具体的諸点を以下記す。

西洋絵画を鑑賞対象とする際，絵の諸特徴を押さえる分析的アプローチと共に，絵を取り巻く生活・社会・歴史等を重層的に捉え，絵と人との繋がりを視野に置く文化論的見方も要請される。前者は図録・画集類または企画展鑑賞等で或程度達成できるが，後者の実感的把握を可能とするのは経験知としては現地鑑賞しかないと判断する。作品理解と同時にその体験を，日本の学習者に伝えたい。そこで，本研究を進めるに当たっては，可能な限り収蔵機関(美術館・聖堂等)へ赴き，鑑賞対象の実見・熟視と密度濃き現地体験を積むよう心掛けた。雑感的語りであったとしても，日本の学習者は，絵の現物観察と現場体験から繰り出される指導者のエピソードを愉快な豆知識を得るような感覚で喜ぶので，現地鑑賞は必須と位置付け実行した。文化財が誕生し育った生活環境・社会風土と関係付けて絵を捉えようとする姿勢は，異文化理解学習に自ずと近付く点も補記したい。

研究方法でもう 1 点強調したいのが東西比較である。日本美術理解と補完し合うことで，西洋絵画理解は十全さを増し得るとの見解に立ち，本研究期間中，国内各種企画展で日本美術も多数実見し，日本美術関係書籍も諸篇読み，両文化を結び付ける東西比較的観点を導入した読解ベース型鑑賞指導メソッドと鑑賞題材を提起できた。

本研究各期に鑑賞対象に選び，論文・口頭発表・研究報告で鑑賞題材化を試みた西洋絵画(何れも現地で実見済)と日本美術(実物数点未見)の主要対象は次の通りである。対とした東西作品 2 点は+(プラス記号)で繋いだ。

【第 1 期】ヒューホ・ファン・デル・フース「ポルティナーリ祭壇画(1475-80 年)」+尾形光琳「燕子花図屏風(江戸時代[18 世紀])」，ロヒール・ファン・デル・ウェイデン「十字架降架(1435-38 年頃)」+「応徳涅槃図(1086 年)」

【第 2 期】ベラスケス「アラクネの寓話(織女たち)(1657 年頃)」，ベラスケス「大修道院長聖アントニウスと隠修士聖パウルス(1634 年頃)」+「信貴山縁起絵巻(12 世紀後半)」

【第 2-3 期】レンブラント「夜警(1642 年)」

【第 3 期】ヴェロネーゼ「カナの婚宴(1562-63 年)」，ハンス・メムリンク「聖ヨハネ祭壇画(1479 年)」，ハンス・メムリンク「聖母子とマルティン・ファン・ニーウェンホーフェの肖像(1487 年)」

４．研究成果

読解ベース型鑑賞指導メソッドの論考と鑑賞題材作りの 2 つが両輪を成す本研究は，当初，指導メソッドの理論的検討に始まり，その精緻化・実用化を目指す流れに，鑑賞題材の準備作業から実際的な組織・構築に向かう流れが絡む，比較的段階的な進め方を計画した。が，実際に着手して解ったのは，題材開発は指導メソッドを基盤に据えなければ進展できず，よって，途上と思えても，指導メソッドの現時点の研究成果を題材開発に適用することが研究全体の発展にとって有益な点であった。

「見る+読む」という基本手法の多角化を図り，読解ベース型鑑賞指導メソッドを拡張してゆく中で，現地観察も導入し，選定した種々西洋絵画を対象に，絵を知ろうとする内発的動機を高めながらより楽しくより興味深くより中身濃く学べる鑑賞題材を組織しようと努めた。その成果は，各期 1 本投稿した論文(査読付)計 3 篇，各期秋・春 2 回ずつを原則に 2 つの学会で行った口頭発表計 5 件，ICT 機器利活用的観点から絵の細部視認と細部の読み取りを論じた研究報告 1 件にまとめ公表した。

各期研究成果を以下概述する。

【第 1 期】読解ベース型鑑賞指導メソッドの理論面の検討を行う時期とし，関連しそうな日本美術の調査も始めようと計画したが，結果的には，読解的鑑賞における東西比較を前面に押し出す実験的色彩の濃い期間となった。論文で扱った，花を共通項とする 2 作は，ヒューホ・ファン・デル・フース「ポルティナーリ祭壇画(1475-80 年)」三副対の中央パネルを特徴付ける，花卉図(花の静物画)のような前景場面と，尾形光琳「燕子花図屏風(江戸時代[18 世紀])」とし，前者はキリスト教図像学と聖書記事(ルカ 2:1-7)，後者は『伊勢物語』第九段〈三河国八橋〉から図像読解を進める鑑賞題材化の視点を論じ，両作を往還する 8 段階の授業構想を提起した。学会発表では一歩踏み込み，ロヒール・ファン・デル・ウェイデン「十字架降架(1435-38 年頃)」に「応徳涅槃図(1086 年)」をぶつけ，師の死に直面した弟子・近親者達の慟哭から「悲しみ」なる普遍的主題を見出し，また，死を巡るキリスト教と仏教の不思議な主題的近接性を確認しながら絵を読み込む鑑賞題材を提案した。

【第 2-3 期】2 期跨ぐ形で，既発表(第 55 回大学美術教育学会/2016 年 9 月 25 日)のテーマを掲げ，執筆を始めた論文では，17 世紀オランダで興隆した集団肖像画の革新的な 1 作と評し得る，レンブラント「夜警(1642 年)」を取り上げ，図像学ベースの細部解読，東西比較(対象作品：『伴大納言絵詞』下巻収載の一場面〈伴大納言追捕のためその邸に向かう検非違使の一行〉)，群衆内に潜む自画像の探査，画中人物を真似るロールプレイ，脱整列型の学級記念写真撮影等を盛り込む読解的鑑賞案を連稿で示した。

【第 2 期】論文と併走し，学会発表では，西洋絵画のテキストの 2 種源流と捉え得る，一方はギリシア神話(出典：オウィディウス『変身物語』)，他方は聖人譚(出典：ヤコブス・デ・ウォラギネ『黄金伝説』)に依拠した，プラド美術館蔵のベラスケスの絵 2 点を鑑賞対象に選び，各々に関しテキストに則る読解ベース型鑑賞指導メソッドの精緻化を図り，鑑賞題材を提案した。前者が，女神ミネルウァと熟達した織工アラクネが機織り合戦を繰り広げて後，女神ミネルウァがアラクネを蜘蛛に変えてしまう話を扱う，「アラクネの寓話(織女たち)(1657 年頃)」，後者は，二聖人の邂逅を主題化した，「大修道院長聖アントニウスと隠修士聖パウルス(1634 年頃)」で，両作共認められる，時系列の異なる複数場面を同置する異時同図法を主たる学習事項とした。前者の比較対象を「風俗画屏風(彦根屏風)(寛永期[1624-43 年])」としたのに対し，後者鑑賞では東西比較的方略の導入を中核的課題とし，物語上の類似点が多い「信貴山縁起絵巻(12 世紀後半)」と絡まり合いながら，両作の読解的鑑賞が進むプログラムを提起した。

【第 3 期】最終年度は，メムリンク美術館(聖ヨハネ施療院)で実見の機会を得，寸法，画肌の物質的状態，二連画・三副対の構造，展示環境等を確認できたハンス・メムリンクの絵 2 点，「聖ヨハネ祭壇画(1479 年)」と「聖母子とマルティン・ファン・ニーウェンホーフェの肖像(1487 年)」を鑑賞対象に選んだ。前者は，学会発表で取り上げ，『新約聖書』を締め括る「ヨハネの黙示録」数章を正確に視覚化した右翼を読み解く，計 8 段階の授業計画を示した。後者は，ICT 機器利活用が有効な細部視認を論じた研究報告で扱い，細部視認ベースの読解的鑑賞の一形態を試案ながら提起した。加えて，上記発表に先立ち，身近な食事を主題に，ルーヴル美術館蔵のヴェネツィア派の巨大祭壇画，ヴェロネーゼ「カナの婚宴(1562-63 年)」を読解する 7 段階で成る鑑賞授業プログラムを構想した。東西比較段階も含め，比較対照作品として，歌川広重「東都名所 高輪廿六夜待遊興之図(天保 12-13 年頃)」を使う案を示した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 4 件）

(1) 岡田匡史，レンブラント「夜警(1642 年)」の鑑賞題材化(7 段階鑑賞学習プログラム)の試みⅡ―集団肖像画の読解的鑑賞の一局面(形式的分析，知識補塡[情報提供]，補充課題を中心に)，美術教育学研究―大学美術教育学会誌，査読有，第 51 号，2019，pp.113-120

(2) 岡田匡史，レンブラント「夜警(1642 年)」の鑑賞題材化(7 段階鑑賞学習プログラム)の試みⅠ―集団肖像画の読解的鑑賞の一局面(観察・記述と自由解釈を中心に)，美術教育学研究―大学美術教育学会誌，査読有，第 50 号，2018，pp.121-128
https://www.jstage.jst.go.jp/article/uaesj/50/1/50_121/_article/-char/ja/

(3) 岡田匡史，花の絵の系譜の読解的鑑賞―ヒューホ・ファン・デル・フース「ポルティナー

リ祭壇画」と尾形光琳「燕子花図屏風」の東西比較を含む鑑賞題材の提案，美術教育学研究―大学美術教育学会誌，査読有，第 49 号，2017，pp.89-96
https://www.jstage.jst.go.jp/article/uaesj/49/1/49_89/_article/-char/ja/

〔学会発表〕（計 5 件）

(1) 岡田匡史，ハンス・メムリンク「聖ヨハネ祭壇画(1479 年)」右翼の読解的鑑賞の試み―「ヨハネの黙示録」の記述内容と連関する諸図像の発見と学習を中心に，第 41 回美術科教育学会(札幌大谷大学)，2019
(2) 岡田匡史，ヴェロネーゼ「カナの婚宴(1562-63 年)」の読解的鑑賞―食事の絵の系譜からの題材提案，第 57 回大学美術教育学会(奈良教育大学)，2018
(3) 岡田匡史，『信貴山縁起絵巻(12 世紀後半)』との比較を伴う，ベラスケス「大修道院長聖アントニウスと隠修士聖パウルス(1634 年頃)」の読解的鑑賞の試み，第 40 回美術科教育学会(滋賀大学)，2018
(4) 岡田匡史，ベラスケス「アラクネの寓話(織女たち)(1657 年頃)」の読解的鑑賞の提案―神話に則る絵の学びを基盤とした西洋理解の一試行，第 56 回大学美術教育学会(広島大学)，2017
(5) 岡田匡史，悲しみの表現に着目した，ロヒール・ファン・デル・ウェイデン「十字架降架(1435-38 年頃)」の読解的鑑賞の探求―「応徳涅槃図(1086 年)」を使う東西文化比較を含む題材構築の提案，第 39 回美術科教育学会(静岡県コンベンションアーツセンター)，2017

〔研究報告〕（計 1 件）

(1) 岡田匡史，細部視認的観点からの ICT 機器活用と鑑賞教育の考察(題材開発に向けた準備段階の研究)―ハンス・メムリンク「聖母子とマルティン・ファン・ニーウェンホーフェの肖像(二連画)(1487 年)」を使う読解的鑑賞試案，信州大学教育学部研究論集，査読無，第 13 号，2019，pp.50-69
http://hdl.handle.net/10091/00021356